

平成26年度



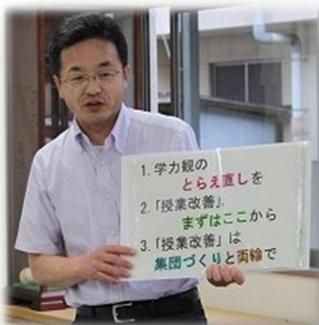
浜田教育事務所だより

第50号 平成26年9月17日

- ◆企画幹あいさつ (P1)
- ◆派遣指導主事・社会教育主事より～川本町・江津市～ (P5～7)
- ◆授業力向上研修より (P2, 3)
- ◆授業改善の取組にむけて (P8)
- ◆道徳教育 (P4)

風

企画幹 石橋 邦彦



「わが校は変わり始めた。私はこの学校の職員であることを誇りに思う。」

管内の学校の1学期の職員による学校評価に書かれた一文です。ミドルリーダーの発案に一部の職員が応えました。その輪は次

第に大きくなり、仕舞いには学校ぐるみの取組となりました。すぐに子供たちに変化が現れました。その動きを間近に見ていた職員は、「自信」と「誇り」を取り戻し、学校がプラスの方向に大きく動き出しました。

「この学校の職員であることを誇りに思う。」なんて素敵な言葉なのでしょう。そんなことを言わしめる職員室には、きっと素晴らしい風が吹いているに違いありません。これからも帆にいっぱい風を受け、学校ぐるみで様々な取組を加速させていかれることでしょう。

この夏、私は浜田で行われた様々な研修会に携わりました。そこで目にしたのは、自ら学ぼうとされている先生方の真剣なまなざしでした。協議の時間には、年代を越え活発な意見を交わす先生方の姿がありました。

講師の先生が共通して私に言われたのが、浜田会場の熱気でした。「ここの会場は反応が良く、明るく前向きである。」「2学期からの実践に役立てよう、一つでも多く学ぼうと目を輝かせておられる。」「話しているうちに、自然とのってきてしまう。」「なんだか私までほめられたようで、誇らしく思いました。」

浜田教育事務所の指導主事は、1学期に53校を訪問し、53時間の授業を拝見しました。そのすべてで、『よい授業』を目指した様々な取組が見られました。互いの授業力を高めるために熱心に協議が行われました。普段から「授業の見せ合い・語り合い」が行われている学校も多くありました。学校訪問指導を通じて、各学校に「授業改善への風」が吹き始めていると確信いたしました。

7月末には、島根県学力調査の結果が、そして8月末には全国学力・学習状況調査の結果が各学校に返却されました。いかがだったでしょうか。

これまでの取組の成果を確認し、順風満帆2学期に漕ぎ出された学校もあるでしょう。新たな課題が見つかり、一旦寄港された学校もあるでしょう。一方、成果が見られず、逆風の中出港をためらっておられる学校もあるのではないのでしょうか。中には、「自信」や「誇り」を失いそうだと思っておられる先生もいらっしゃるかもしれません。

「数値」に一喜一憂する必要はありませんが、どのような結果であれ、きちんと正対し、結果を分析した授業改善の動きを避けるわけにはいきません。

「知識基盤社会」と言われる21世紀を生き抜くためには、目の前の子供たちに「21世紀型能力」を育成していくことが求められています。

そのためには、「指導者中心の授業」から「学習者中心の授業」へのパラダイムシフトが不可欠です。情報通信技術なども駆使しながら、子供たち一人一人がお互いの知恵を出し、話し合いながら学習する問題解決型の授業への転換も求められています。

この夏、先生方は多くのことを学ばれたと思います。その貴重な「学び」が単なる「知識」や「技能」にならないように、まずは自分の授業で「実践」してみてください。そして校内で「共有」することで風を起し、学校ぐるみの「協働」へと広げてみてください。そうすることで、冒頭に紹介した学校のようなプラスの動きが起きてくると、私は考えています。

「思い出多い夏休み」を過ごした子供たちが元気に登校・登園し、いよいよ2学期がスタートしました。一人一人の子供たちに、「実りの多い秋」が来ますよう、ご指導のほどよろしく願いいたします。

今学期も学校訪問指導でお世話になります。単元構成や指導案作りのところから、ご相談いただくことも歓迎です！詳しくは訪問予定指導主事にご連絡ください。

小学校学力育成リーダー研修(9/5)において、礒部教科調査官が、自校の課題を踏まえた校内研究や授業改善の重要性について話されました。各学校におかれましては、自校の課題に即した取組を一層進めていただきますようお願いいたします。

なお、指導主事の学校訪問の際には、そうした話題にも触れていただければ幸いです。

しまねの子供たちに 思考力・判断力・表現力を育てるために

～総合的な学習の時間をはじめとする
教科等の授業改善を図る指導を通して～



学校教育スタッフ
指導主事 松本 潔

1. はじめに

夏休みの初め、7月24日に、浜田教育センターにて、「小学校授業力向上研修」が開催され、文部科学省の田村学教科調査官が講師をしてくださいました。教科調査官は、ここ10年間、文部科学省で生活科と総合的な学習を担当しておられます。研修の時に伺ったお話や、最近参加する機会があった他の研修での講師のお話、学習指導要領や関連する書籍等、そして「第2期しまね教育ビジョン21」から、私なりにまとめたお話をさせていただきます。

2. なぜ、思考力・判断力・表現力を育てる必要があるのか？～私たち教員が求められている、子供たちに付けたい力とは何か～

はじめに、少し大きい話からします。最近の国内・世界情勢を知れば知るほど、現代は、「明日何が起きてても不思議ではない」世界に既になっているようです。

今から18年も前の、中央教育審議会第1次答申は、「これからの社会」を、「一概に言い表すことは難しいが、いずれにせよ、変化の激しい、先行き不透明な、厳しい時代と考えておかなければならないであろう。」と、すでに予測していました。この社会は、世界的な規模で、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「**知識基盤社会**」と呼ばれています。答えが一つとは限らない様々な課題が、世界全体に、日本社会に、島根県に、そして私たち個人や、個人の生活に向けて、絶えず突きつけられる社会です。その諸課題に対して、**最善解を求め、他者と協同し、行動し続けることで、何とか乗り切ることができる社会**です。

平成25年度から始まった第2期教育振興基本計画によると、そのような厳しい社会を乗り切るために、我が国の危機回避に向けた(教育行政の)基本的方向性が4か条挙げられました。その一つが、「**社会を生き抜く力の養成**」です。この力の養成に関する、幼稚園教育から高校教育までの目標の一つが、「**生きる力の確実な育成**」です。行動目標的に言い換えると、「**生涯にわたる学習の基礎となる「自ら学び、考え、行動する力」などを確実に育てる**」こととなります。

島根県は、教育基本法に基づき、国の教育振興基本計画を受けて、この7月に県の教育振興基本計画を策定しました。それが、「**第2期しまね教育ビジョン21**」です。基本理念を「**島根を愛し 世界を志す 心豊かな人づくり**」と定め、「**向かっていく学力**」「**広がっていく社会力**」「**高まっていく人間力**」という三つのキーワードで表される教育目標を掲げています。三つの教育目標の達成に向けて諸施策を相互に関連性をもって展開し、**厳しい社会を生き抜くための「生きる力」を、島根の子供たちに確実に身に付けさせたい**と考えています。

「向かっていく学力」では、地域社会での豊かな体験、多様な人々との出会いや交流を通して、子供たちが自らの学びの目標を持ち、その夢や希望の実現に向かっていくことができるための学力をつけることをねらっています。すなわち、「**知識、技能**」や「**思考力、判断力、表現力、問題発見・解決力など**」の「**学んだ力**」と、「**学習意欲、知的好奇心、学習計画力など**」の「**学ぶ力**」から構成される「**学力**」です。

私たちが、子供たちの「思考力・判断力・表現力」を育む根拠は、ここにあります。

3. 子供たちが思考力・判断力・表現力を身に付けるための授業改善について～言語活動の充実を意識して～

子供たちが「向かっていく学力」を身に付けるためには、**日頃の授業の中で、その力が身につくような指導が必要**です。

まずは、授業を通して**知識・技能の確実な習得**を

図ることです。教科調査官によると、子供からのアウトプットを増やすほど、学習事項の確実な定着が図られるそうです。つまり、単独でインプットされていた**一つ一つの知識(単独系の知識)**である既習事項を活用して、それぞれの教科特有の課題を解決するために、さらに新しい情報をインプット(習得)し、自分で思考し、判断し、自分なりの考えを伝える(表現する)アウトプットの過程で、**知識と知識が子供の中で、その子供なりの関連付けでつながり、一つの知識の塊(関連系の知識)**となることで、**知識・技能の確実な定着が図られる**ことなのです。教科調査官は、このことを**習得と活用的一体化**を目指すことと言われました。

そのためには、**国語科を要として、各教科等の授業に言語活動を取り入れ、充実させることが大切です**。言語活動の例示としては、以下のものがあげられています。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する。
- ② 事実を正確に理解し伝達する。
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ④ 情報を分析・評価し、論述する。
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

例えば、⑥のような言語活動を通して、お互いの関連系の知識が相互に影響しあい、それぞれの子供の中でさらに新しくつながり、より一層学習事項の定着が進んでいきます。このことは、**協同的な学習の効果**でもあります。なお、協同的な学習を進める上では、**親和動機と達成動機に着目する視点**も大切です。

教科等の学習で、各教科の特質を生かした言語活動を充実させて、習得と活用的一体化を目指す授業を行い、学習事項の定着と思考力・判断力・表現力を育んだ上で、今度は**教科を超えた横断的課題等の解決を目指して、さらに探究的な学習を行い、子供たちの思考力・判断力・表現力を一層高めようとするのが総合的な学習の時間の役割**です。

総合的な学習の時間における探究的な学習では、日常生活や社会に目を向けて、子供たち自らが設定した課題について、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現→…」という過程が繰り返されることで、習得した知識・技能は、まず

まず関連を複雑化・強化し、広がりを見せます。そして、やがては単なる知識・技能ではなく、それぞれの生き方を考えることを含めて、人生の様々な場面で活用できる能力、**キャリア教育でいわれている「基礎的・汎用的能力」とか「キーコンピテンシー」とか「21世紀型能力」といわれる能力**に発展することが期待されています。つまり、「生きる力」につながるわけです。

ところで、日本の教師は、この探究的な学習過程の、「**課題設定**」と「**整理・分析**」の指導が**不得手な傾向**があると、教科調査官が言われました。課題設定については、子供たちが、既に当たり前と感じている事象を、当たり前ではないかもしれない、なぜだろうと考えたくなるような**教師の仕掛けの工夫が必要**です。島根大学教育学部の加藤寿朗教授は、社会科を進める上で、「**今あることを当たり前と思わない子供を育てる**」ことを大切にしたいと言っておられました。この視点は、社会科だけでなく、総合的な学習の時間でも、各教科等でも必要な視点だと思います。

また、整理・分析については、**思考を可視化し、かつ整理するのに便利な「思考ツール」の活用がお勧め**です。結果を残すという意味では、ノート指導も欠かせません。

4. 終わりに

子供たちは、十数年もすれば大人となりますが、すでに大人である私たちも、この厳しい「知識基盤社会」を生き抜いていかななくてはなりません。子供たちは成長して、やがて私たちの社会の隣人となります。その子供たちと、協同して社会を作り上げていくためにも、総合的な学習の時間をはじめとする各教科等の授業改善を図りながら、私たち教師自身も「社会を生き抜く力」を身に付けようではありませんか。

- 【参考資料】それぞれの HP で検索をかけてください
「言語活動の充実に関する指導事例集」
「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」(いずれも文部科学省)
「言語活動の充実 Q&A」(島根県教育センター)



道徳教育の今後&今やりたいこと

～ 指導力アップを目指して～



学校教育スタッフ

指導主事 堀江真佐邦

◇道徳教育の今後について
「道徳に係る教育課程の改善等について(諮問)」を受け、道徳教育の教育課程上の位置付けや、その目標、内容、指導方法、評価の在り方等について専門的に検証するため、現在、文部科学省教育課程部会道徳教育専門部会で話し合いが行われています。今年8月末までに9回の部会を重ねているようで、その内容等についてはホームページに掲載されています。

議事録を見ると、日本の道徳教育がどのような方向にいくのかが見えてくる気がします。もちろん現時点では、その方向性がはっきりと示されているわけではありません。しかし、平成25年12月に、道徳教育の充実に関する懇談会から出された「今後の道徳教育の改善・充実方策について(報告)～新しい時代を人としてより良く生きる力を育てるために～」(以下「報告」という)を踏まえて議論がなされており、当然、「特別の教科 道徳」(仮称)についても前向きに議論されています。

今後のビジョンが見えてくるのは、年末になるという見通しだそうです(全国指導主事会での伝達)。

◇今やりたいこと
どのような方向になろうとも、道徳の時間がなくなるわけではありません。むしろ、これまでよりも重視される方向であることはご承知のとおりです。ならば、この先どうなるのかを案じてじっとしていることは得策ではありませんよね。それよりも、道徳の時間を今以上に充実させる、あるいは子供も教師も“ためになる”とか“楽しい”“好き”という時間にしていきたいですね。そのためにも、次のことを再確認、点検・整備してみたいと思います。

◇今やりたいこと

どのような方向になろうとも、道徳の時間がなくなるわけではありません。むしろ、これまでよりも重視される方向であることはご承知のとおりです。ならば、この先どうなるのかを案じてじっとしていることは得策ではありませんよね。それよりも、道徳の時間を今以上に充実させる、あるいは子供も教師も“ためになる”とか“楽しい”“好き”という時間にしていきたいですね。そのためにも、次のことを再確認、点検・整備してみたいと思います。

<校長先生の方針の確認>

学校経営方針の中に、育てたい子供像、あるいは道徳教育に関する基本的な方針の明示があるはずですが、

<道徳教育推進教師を中心とした協力体制の点検>

学習指導要領解説道徳編には、道徳教育推進教師の役割が8つ例示してあります。それは、“学校が組織体として一体となって道徳教育を進めるために、全教師が力を発揮できる体制を整える”ためです。かといって、すべてを推進教師一人がやるということではありません。全教師が参画する体制を具体化するためです。

<全体計画(別葉)の作成>

道徳教育の全体計画作成に当たっては、道徳の時間以外における“指導の内容及び時期”等を示す必要があることが明示されています。

現時点では、これが整っている学校は少ないようです。道徳の時間が道徳教育の要の時間であるためにも、補充・深化・統合の時間であるためにも整備が必要です。10月に行われる「道徳教育推進教師等研修(悉皆)」では、このことについての説明があるようです。

<魅力ある授業づくりのための切磋琢磨>

前述の報告の中には、“各学校においては、特定の指導方法を絶対化することなどにより、道徳教育の授業が画一的なものとなったり、教師の一方的な押しつけにつながったりすることのないよう留意しつつ、柔軟でバランスの取れた指導方法の開発・実践に努めて…”、“道徳教育の特質を踏まえた多様な授業のあり方について教師間で切磋琢磨し合うとともに、子供たちの多様な実態や発達の段階に即した柔軟な指導方法など、…生み出していくことが期待される”とあります。ねらいに近づくための指導方法の工夫について、道徳の授業や道徳教育のことが議論・推進できる体制づくり等について、

“協働” “創造”

していくのは…

「今でしょ！」(古くて<_)>



各市町の取組から ～川本町～



**派遣社会教育主事
松原 聡**

川本町に派遣されて3年目。1年目は（今もありますが）、会う人すべて面識のない方ですので、お話や電話をするときはいつも緊張しました。この仕事は、公民館や地域住民の方をはじめ、個人宅や会社などの事業所にも訪問します。見知らぬ者が訪れると「誰だろう？」と当然思われます。このつながりが無い白紙の状態から点と点のつながりを何とか築き上げ、さらに太いつながりを築いていきます。もちろん電話一本ということもありますが、基本は顔と顔を合わせてとなります。一見、この時代に「不便」と思うかもしれませんが、靴のかかとをすり減らして作り出す人と人のつながりに勝るものはないと思います。ときには落ち込むこともあります。ですが、ひと・もの・ことの資源を活用して、価値を産み出すための一連の取り組みのプロセスを共有できることは、

比べものにならないほど大きな喜びと収穫になります。

「頼まれごととは試されごと」という言葉がありますが、人から何かを頼まれるということは、「この人は信用できる人間かどうか」を試されていると思います。ついつい引き受けてしまいます。おかげさまで仕事がどんどん貯まります！

さあ、本日もがんばってまいります！！

「6年間川本町で御世話になったご恩返しをさせていただきます。」挨拶回りの中で、町内の方々にお伝えした言葉です。

今年度から川本町派遣指導主事として川本町教育委員会に勤務をすることになりました。昨年度までも6年間川本町で勤めていたこともあり、「どう、慣れた？」などたくさんの声がけを頂きました。その度に「う～ん！まだちょっと慣れませんねえ」とお答えしていましたが、気付けば4ヶ月という月日が流れていました。

確かに、現場とはまるで違う職務内容に戸惑いも大きく、全てを一から始めている感覚は、本当に久しぶりの経験で、何かを新しく始めることの不安や大変さを改めて実感しました。また、職場や地域には昨年度までにこの川本町で出会えた方々も多く、ご恩返しどころかまだまだしっかり支えて頂きながらの勤務です。

さて、夏休みも終わり、学校現場では、子供達の明るい笑顔や笑い声があふれていることと思います。

夏休みには、4月に行われた「島根県学力・学習状況調査」「全国学力・学習状況調査」の結果の分析が行われ、年度当初の「学力育成」についての取組を検証・修正して頂いているところです。校長先生や学力育成リーダーの先生を中心に「学力育成」の気運を高め、全職員で「授業改善」に向けての成果や課題を共有し、協働して前に進んでほしいと思います。先生方は、努力を惜しまず、目の前の子供達のことを考え、日々取り組んでいらっしゃると思います。その努力や熱意が、効率よく結び付くよう『協働』していきたいと思います。

昨年度までの部活動の中で、「いつも支えてくださる地域の方々に恩返しをしよう」「感謝の気持ちを忘れないようにしよう」と伝え続けていました。自分の中では、学校は、たくさんの支えの中で成り立っているものだと思ってはいましたが、教育委員会に勤務して学校教育は、「本当にたくさんの方々に支えられているんだな」と実感しました。

私も日々勉強を重ね、「先生方や子供達の輝く瞳や笑顔があふれる」学校にするために少しでも川本町の学校教育のお役に立てるようになりたいと思っています。よろしく願いいたします。



**派遣指導主事
大地本央仁**

各市町の取組から ～江津市～

指導主事となって5年。心のかけ橋支援事業を通して知り合い、ずっと関わってきた若者たちがいる。彼らは学齢期に不登校となり、中学校卒業後も教育支援センター「あおぞら学園」の施設内にある一室（現在は「いっぼ」と称している。）を、週に2日居場所として使っている。主にスポーツを楽しんでいたが、「仲間意識を高める」という指導員の意図で、年に2、3回宿泊体験もしてきた。そうしているうちに、アルバイトやパートをしていた子が、正規社員として働くことを決意し新たな歩みを始めた。これが一つのきっかけとなり自立への動きが加速した。近くの保育所や放課後子供教室のボランティアをしたりアルバイトを始めた。それぞれが少しずつ動き出した。



派遣指導主事
岡田和明

昨年度末、全員がはれて成人となり、お酒を飲みながら話をすることもできるようになった。話題のほとんどは今時の若者の話？でなかなかついていけないが、たまに「俺たち、あおぞら学園であんなに勉強しとった？今のような俺はよう行かん…」といった、はっとさせられることや、「あおぞら学園みたいなところをつくるにはどうすればいい？」といったうれしい言葉も聞かれる。

不登校については「早く解消し、学校に行くことができるように！」という思いで日々取り組んでいる。が、そうはならないことも多い。そんな中でこの子たちの着実な歩みは、関係者の励みとなっていると同時に、「学齢期のうちに解決できなくても悲観することはない。」ということも教えてくれている。



派遣指導主事
堀 康弘

「ある学校訪問から」

昨年度、訪問した市内の学校で、対応してくださった校長先生が言われた言葉がこの1年ずっと心に残って消えません。

それは、昨年の2学期がスタートしたばかりの9月初旬、学力調査結果及び市教委による分析結果を伝えるために、市内12校を訪問した時のことでした。その校長先生は、「このクラス（学年）の結果が良くなかったことを、このクラスの担任のせいにはしない。学校全体の課題として考えたい。」ときっぱりとおっしゃいました。私は、そのクラスの子供たちの「学習規律」、「学級集団としてのまとまり」や学級担任の「授業力」や「学級経営力」などに視点を当てられると予想していました。しかし、その校長先生は、全く別の

視点で考えておられました。その校長先生は、子供たちやそのクラスの担任教員1人だけに原因を求めのではなく、学校として、すべての教職員でその課題解決に向かおうとする姿勢を示されました。

2学期から、「ねらい」と「振り返り」の徹底をはじめとして、教頭先生等の協力を得て少人数指導に取り組まれたり、学習支援員の配分を変更されたり、放課後学習で間違った問題のやり直しに取り組んだりするなど、様々な方法で指導・支援を充実されました。特に、すべての教職員で子供たちへの声かけを意図的に増やし、多くの場面で子供たちを認めるようにされたようです。訪問するたびに、そのクラスだけでなく職員室や学校全体が、活気づいていく様子がこちらに伝わってきました。

今年度、その学校の学力調査結果が改善したことは言うまでもありません。

県学力調査の生活・学習意識調査で「〇〇（教科名）の授業は分かりやすい」という質問に対して、8割の子供たちが肯定的な回答（「そう思う。」「ややそう思う。」）をしています。実際に学校訪問し授業を参観する中でも、子供たちの学習理解を助ける手立てが十分とられています。「導入でカードを使って、今まで学んだ知識を振り返っています。」「基礎から発展まで複数の学習プリントを用意し、子供たち自身が選択し取り組めるようにしています。」「ねらいと振り返りを、意識できるようにカードを準備し黒板に張り付けるようにしています。」「書くことを苦手に行っている子供たちが多いため、キーワードを用いて考えをノートにまとめるように声をかけています。」いつも子供たちのことを考え、授業を改善していこうとされる先生方の姿、本当に頭が下がります。熱心な先生方の姿に、子供たちも一所懸命学習に打ち込むことができるのでしょう。



派遣指導主事
橋井 泰治

一方で気になる質問項目として「〇〇（教科名）の授業は好きだ」という質問に対して肯定的な回答が6～7割程度にとどまる点です。分かりやすい授業を受けていると感じてはいるものの好きになれないと考えている子供たちがいるということです。課題を自分事として捉え、「知りたい。」「伝えたい。」「学んだことを使ってみたい。」と思えるような探究場面を設定していくことで改善が図られるのではないかと考えています。「授業の中では、できるだけ子供たち同士の発言をつなぐように意識しています。」と話して下さった先生がおられます。大切なポイントが隠されていると感じました。これからも頑張っておられる先生方、子供たちの応援をしていきたいです。

※「浜田事務所だより」No49、大田市の取組のページにおいて吉田茂延社会教育主事について「特別支援教育担当」とありました。間違いですので訂正します。

インクルーシブ教育システム構築支援データベースが公開されました

「インクルーシブ教育システム」という言葉をお聞きになったことがあると思います。本年1月に日本が批准した「障害者の権利に関する条約」の中で求められているもので、次のようなポイントがあります。

- 人間の多様性の尊重等の強化
- 障がいのある人が能力等を可能な最大限まで発達
- 自由な社会に効果的に参加
- 障がいのある人とない人が共に学ぶ
- 障がいのある人が一般的な教育制度から排除されない
- 個人に必要な合理的配慮の提供



さて、ここに挙げた「合理的配慮」についての実践事例等のデータベースが国立特別支援教育総合研究所のサイトで公開されましたので、また時間のある時に閲覧してみてください。

<http://inclusive.nise.go.jp/>

授業改善の取組に向けて ～夏季休業中の講座から～

夏季休業中にはたくさんの講座が開催されました。受講された皆さんによって校内研修等で共有が図られたことと思います。教育事務所スタッフもできる限り聴講させていただいたところですが、様々なカテゴリーの研修において、全ての教育活動に**共通して大切にしたいこと**を多く聞くことができました。

キーワードは、「**学級経営**」と「**意識改革**」です。

★副島賢和氏（昭和大学、TVドラマ「赤鼻のセンセイ」のモデル）：7/25「障がい種別専門研修（院内学級）」

★奥水かおり氏（玉川大学）：7/30「小学校国語科教育講座」

★浜田教育事務所から：7/28「授業改善研修」

「授業改善」の基盤は 学級経営！

子供たちは教師を見ています。
（奥水氏）

子供たちは「成功すること」を
求められ過ぎてはいないか？

子供は教師の失敗を見ると喜び。本当に見たいのは失敗そのものではなく、**失敗にどう対処するか**ということ。

（副島氏）

学級経営の大切さ…子供とのかかわり



教師の大切なかかわり

- ①本人の**好きなこと、得意なこと**を探りその面で付き合う。
- ②**活躍の場**を作る。
- ③**安心していられる場**を作る。
- ④**不快な感情をことばで表現**する。

（副島氏）

「感情」に良し悪しはない

マイナス感情をもつこと自体を否定しない。その表出の仕方が大事。表出された感情はサインでありシグナルである。そこからのメッセージを受け取る。（副島氏）

「授業改善」への意識改革Ⅰ

- ①「**教科書を教える**」から「**教科書で教える**」へ
- ②子供たちが**自分の考え**をもつこと
（全くもたないのはだめ、ほんの少しでももつ。そのため一人学びを確保する）

（奥水氏）

「授業改善」への意識改革Ⅱ

- ③**宝くじ型授業からの脱却**
（「当たった～！」という一つの解ではない。「なぜそう考えたか」（＝言語活動）が大切）

（奥水氏）

意識改革

別世界の話としてではなく、**わが身に引き寄せて**、自分の文化（自分の経験、仕事）に翻訳しながら聞く。

視点を変え、想像すること。研修や講演等で学ぶときの意識を変えよう。（副島氏）

各学校の「やってみよう」

具体的取組、特別支援教育の視点、生徒指導の視点…**授業は既に変わってきています。**

常に次の一步を考えましょう。
（浜田教育事務所）



ゆるキャラグランプリの投票もよろしく！

